

片山洋子作 「わたしは だれ？」

<前編>

(効果音)

(教室のガヤ)

永沢真由美

えー！ 加代子ったらB型なの？ ひえー、軽いんだ、やっぱ。

掛川加代子

あ、「やっぱ」って何よ。ひどいなあ、真由美ったら。ねえ、理恵。

岡田理恵

ん？ うん。でも加代子はB型って感じがするね。

真由美

ほんとほんと。よく言えば“社交的”。悪くいえば“軽薄”ってかあ。

理恵

真由美ったら、もう。うーん、だからさ、加代子は明るい子だよ。

加代子

ブー。もう。だから血液型の話はしたくなかったんだよね。あら、そういう真由美はなんなのよ。

真由美

え、わたし？

加代子

何型なのよ、真由美？

真由美

わたしは… AB型だけど…

加代子

(かぶせて)どひえー！ 恐怖のAB！ 二重人格のAB型、ってかあ。

理恵

加代子ってば。

真由美ナレーション

あーあ、こんな血液型の話、するんじゃなかったな。“恐怖の二重人格”。当たってるだけに、キツイよなあ。同じクラスの掛川加代子は、おきゃんな女の子。明るくて、かわいくて、いい子だけど、ちょっとブリッ子タイプなのよね。岡田理恵は、O型らしく、おっとりさん。それに、クリスチャンで、どこかほかの子と違った優しさを持つてる子。お嫁さんにするにはいい子だと思う、なーんて。かく言うわたし、永沢真由美は、やっぱり恐怖の二重人格。あーあ、自己嫌悪。それでも、ちゃっかり高校2年まで生きてきちゃったもんねえ。暗いなあ。

理恵

ねえ。真由美、そうでしょ？

真由美

え、何が？

加代子

ヤだなあ。聞いてなかったの？

真由美

あ、ごめん ごめん。

理恵

あのね、ほら、前に真由美言ってたじゃない、O型に生まれたかったって。

真由美

ああ、あれね。うん、そうだよ。

加代子

どうして？

真由美

うーん、だってさ、O型ってだれにでも輸血してあげられるでしょ？

加代子

うん うん。

真由美

AB型じゃ、同じAB型の人にしかダメでしょう？

加代子

そう そう。

真由美 だから、好きな人がAB型以外だったら、ねえ、助けてあげられないじゃん。  
加代子 なるほど、なるほど。分かった、真由美！ 白石君のこと考えてるんだ。  
理恵 白石君って、G組の白石哲也君？  
真由美 う、うん。まあ…。  
加代子 アツタリ！ 付き合い始めたんだもんね、真由美。  
理恵 わあ、すごいじゃない。いつから？  
加代子 同じ“バスケットの花”同士だからね。お互いによく観察してたんじゃない？ い  
いなあ、あんなにかっこいい彼氏ができて。  
真由美 何言ってんの。加代子には田中浩一って、背番号8のエイトマンがついてるじ  
ゃん。  
加代子 あは。エイトマンか。顔はイマイチだけど、まあ、優しいから。あ、そうだ、そう  
言えば、「今度の土曜日、みんなで映画見に行こう」って言ってたの、浩ちゃん  
が。ジャッキー・チェンの新作だって。ね、行くでしょ？  
真由美 うん、行く 行く。理恵は？  
理恵 わたしは、土曜日は教会へ行くから。  
加代子 え、土曜日も行くの？ じゃ、残念だけど4人で行こうか。  
真由美 うん。  
ナレーション …というわけで、高校生らしく、グループ交際風に、わたしにとっての初デート  
は楽しく終わったかに見えたのだけど…。  
理恵 おはよう、真由美。どうだった、昨日は？ 楽しかったでしょう？  
真由美 あ、理恵、おはよ。  
理恵 あれー？ どうかしたの？ 元気ない。  
真由美 別に。  
理恵 昨日、なんかあったの？  
真由美 あったような、ないような…。  
理恵 話してみて。すっきりするよ。  
真由美 うーん。大したことはないんだけど。実はね、昨日、帰りに公園でアイスクリー  
ム食べたんだよね。夕方になって風が出てきてさ。それで加代子が「寒い」っ  
て言ったら、ジャケット脱いで貸してあげたんだ、白石君が。  
理恵 あ、浩ちゃんじゃなくて、白石君？  
真由美 そう、白石君。気がつくからね、彼は。優しいというか、ねえ。  
理恵 ふーん。そうねえ。もちろん、白石君は、優しさからそうしたんだと思うけど、真  
由美にしてみれば、ねえ、あまりいい気はしないよねえ。  
真由美 うん、やっぱさ、加代子には浩ちゃんがいるんだし、白石君の服はわたしが着  
たいじゃん、やっぱ。  
理恵 そうか。それで元気なかったんだ。

真由美 ううん、それだけじゃないんだ。

理恵 え？

真由美 別れ道に来た時、加代子はそのジャケットをわたしに返したんだよね。「どうもありがとう。助かっちゃった」だって。冗談じゃないっつーの。自分で借りたもんは自分で返せってのよ。どうして、そういうときだけ、わたしと白石君を恋人みたいにしてさ。気にしてるんだったら、初めから借りなきゃいいのよ。何も言わなかったけどさ。

理恵 そうだったの。でも、その思いはきっと真由美から発射されちゃったんじゃない？

真由美 思い？

理恵 うん。心に思ったわけでしょう？ 聖書にね、「心に思ったことは、そのことをしたのと同じだ」って意味のことが書いてあるの。(マタイ5:28)

真由美 「そのことをしたのと同じ」？

理恵 そう。例えば、「あんチクショ一、死んじまえ」って思ったら“殺人”だし、「あの人と寝てみたい」って思ったら<sup>かんいん</sup>姦淫の罪だし。

真由美 ふーん、キビしいんだ。

加代子 おはよう、みんな。いい天気ね。

理恵 あ、おはよう、加代子。

真由美モノローグ これだよ。B型丸出しだね。

加代子 真由美、昨日は付き合ってくれてサンキュー。面白かったのよね、ジャッキー・チェン。

真由美 う、うん。ほんと。4人で行けてよかったね。理恵も今度行こうね。

理恵 真由美…。う、うん。

真由美モノローグ あー、またやった。AB型の典型。思ってることと、口に出すことが正反対。しかも、マズいことに、理恵にへんに思われてる。とっさに理恵を誘って繕ったけど、マズかったなあ。やっぱ、理恵に話すんじゃなかった。見透かされちゃうもんね。弱み握られたくないし。

ナレーション なんとなくすっきりしないまま、一日が終わる。学校の帰り道――。

加藤先生 やあ、永沢。永沢真由美じゃないか。久しぶりだなあ。

真由美 あ、加藤先生。こんばんは。中学時代はどうもお世話になりました。

先生 相変わらず、礼儀正しいな、お前は。まだバスケットやってるのか？

真由美 肺、スタメンに入れました。あ、妹の育美賀いつもお世話になってます。

先生 おう、中2の妹か。お前とは3つ違いだが、んー、兄弟でも違うもんだな。この間、ハツパかけといたぞ。「お前の姉さんも、1年の時は大したことなかったが、頑張っ、て、努力して、最後にはあの青春高校には入れるまでになった」ってな。

真由美 あ、いや、先生。あまりわたしと比較されるのは、ちょっと。かえって反発しちゃうんじゃない？

先生 いや、だから励ましただけさ。あいつも立派な姉さんもって、幸せだな。

真由美モノローグ ブフ、“立派な”だって。ま、当然じゃん。育美とは中身が違うもん。

先生 でなあ、永沢。育美の服装がちょっと乱れてきてるんだ。悪いやつらと付き合ってるってうわさも耳に入ってるんだがなあ。まあ、お前からも注意しておいてくれや。じゃな。

真由美モノローグ 妹の育美が不良化の兆し？ ああ、でもあの子なら、ありそうだ。小さいころからよく兄弟の物を盗んでた。そう、わたしのお金も、赤いピン留めも。まったく、バカだよ、あの子。不良やるくらいバカなことはない。先生や周りの目に損に映ること、計算すればいいのに。そんだけの度胸があるんなら、その分勉強して、見返してやればいい。グレルなんて、弱虫のやることだ。“逃げ”だよ。最低だよ。まったく、育美のバカが。

真由美 ただいま。

父 おお、真由美か。お帰り。

真由美 あれ、父さんだけ？ 母さんと育美は？

父 母さんはホームマートだ。育美はまだ帰ってないぞ。

真由美 えー、もう8時なのに。どこ行ってんのかな。あのね、父さん。今日ね…(FO)

ナレーション わたしは、加藤先生の言葉を父に伝えた。父も育美の服装の乱れには気づいていたという。しかも、大分前からだそうさ。わたしはちっとも気づかなかった。あまり顔を合わせる時間もなかったが、正直言って、関心がなかったのだ。その夜、初めて父が口火を切った。

父 育美、なんなんだ、その髪の毛は？ その色は？

育美 んん。友達の家がパーマ屋なんだよね。そこでやってもらったの。

母 中学じゃパーマは禁止でしょ？ それも、赤く染めたりして。

育美 いいじゃん。もともと赤いんだもん、あたしの毛は。

父 それに、制服もだ。(FO)

ナレーション 口論の末、育美は家を飛び出していった。父も母も疲れた顔をしていた。母がわたしに跡を追うようにと頼んだ。わたしは夜の商店街を歩き回った。

(効果音) (街の雑踏。次のナレーションのバックで。)

ナレーション 喫茶店、パチンコ屋、ゲームセンター…。一軒一軒、そうっと腰をかがめてのぞき込む。妙な明るさの商店街をわたしは初めて知った。しかし、その心は惨めさでいっぱいだった。こんな情けない思いをどうしてわたしが味わわなくてはいけないのか？ 妹の身を心配する心と、憤りとが入り混じっていた。とうとう妹を見つけ出せないまま、一日が終わった。

次の日、学校で――。

加代子 ねえねえ、真由美。真由美に妹さんいたよね？  
真由美 え？ うん、1人ね。  
理恵 育美ちゃんでしょ。今、中2の。  
加代子 その育美ちゃんがさ、“ディーボーイズ”のメンバーなんだって？  
真由美 え？ “ディーボーイズ”って、あの暴走族の？  
理恵 えー、育美ちゃんが？  
加代子 それが、大変なことに、マップとタイマン張ってるんだって、このところ。そのマップってというのがさあ。  
真由美 何？  
加代子 白石君のお父さんなのよ。  
真由美、理恵 えー?!  
理恵 あ、そうだ。白石君のお父さん、警察官だっけ？  
真由美 ウソー。  
加代子 マズいよね。追ってる暴走族の一人が、息子の恋人の妹だなんてさ。(FO)  
真由美モノローグ ヤダヤだ。育美のことが白石君に分かったら…。ううん、それだけじゃない。白石君のお父さんに、もし万一何かあったりしたら、わたし、白石君に顔も合わせられないよ。どうしよう。あー、育美のバカ。何やってるのよ、もう！ 白石君、どうしたらいいの？ あなたに迷惑かけるようなことだけはしたくない。あなたは大切な人だもの。たとえわたしに何があっても、あなただけは守りたい。たとえわたしに…？ そうだ、関係がなくなればいいのか？ わたしと妹。そう、問題が起こる前に、妹がいなくなればいいのか？ そう？  
理恵 (エコー)「心に思ったことは、そのことをしたのと同じこと。」  
真由美モノローグ あ、ちょっと待って。わたし、わたし、今、何を思ったの？ サ・ツ・ジ・ン？  
(エコー)「心に思ったことは、そのことをしたのと同じこと。」サ・ツ・ジ・ン。殺人?!(多重エコー)

## <後編>

(音楽) 「神の心」  
ナレーション わたし、永沢真由美。血液型ABのご存じ、二重人格。裏と表がある。ジキルトハイドみたい。こんな自分がイヤで イヤでたまらないのだ。どうにも変えられないまま、高校2年まで生きてきちゃった。この間、妹を“殺した”。と言うのが物騒なら、心の中で死んでもらった。「この世からいなくなってしまうー」と思ったからだ。  
(エコー)「心に思ったことは、そのことをしたのと同じこと。」サ・ツ・ジ・ン。殺人?!(多重エコー)  
(効果音) (パトカー、救急車のサイレン)

ナレーション どうとう、起こるべきことが起こってしまった。検問中のパトカーと、育美の乗っていたバイクが接触して、育美はバイクの下敷きになってしまったのだ。内臓がかなり圧迫されて、腹膜炎を起こしかけているという。救急車で運び込まれた病院で、すぐ手術が行われた。わたしがあんなこと思ったばかりに。ううん、そんなバカなことない。これは偶然よ。育美の運命なのよ。神様、仏様、キリスト様。わたしの…、わたしのせいなんかじゃないでしょ？ そうよ、これは天罰なんだ。くだらない不良なんかやって、わたしにあんな惨めな思いさせるから！ そうよ、自業自得ってやつよ。…?! わたし、なんてこと考えてるの？ 今、この瞬間にも、たった一人の妹が死ぬかもしれないっていうのに。わたし、なんて汚い…。

医者 あ一、ですから、今晚が峠ですな。少し血圧が下がっているようで、本人の生命力次第なんだが、生きようとする力が、若干弱いというか…。

父 そんな。うちの娘はまだ14歳なんですよ、先生。生きたくないはずがありますか！

母 いいえ、お父さん。育美がグレてきたのも、元はと言えばあなたが一方的に押し付けの説教ばかりするもんだから、…

父 (かぶせて)なんだと?! おれのせいだというのか？ お前はどうか？ やれ「お花だ」「パートだ」と出歩いて…。(FO)

真由美 汚い。大人は汚い。みんな汚いんだ。だれもわたしを責めることなんかで気やしない。ふん、こんなもんさ、人生なんて。みんなウソつきで、自分がかわいくて、人を傷つけてること気づきもしない。ううん、気づいても知らんぷりなんだ。傷つけ合っているながら、助け合ってるふりして、また横向いて、舌を出して…。そんな親に育てられちゃ、グレルほうが素直かなあ、育美。育美、頑張ってよ。死なないでよ。あんたが死んだら、わたしは一生、あんたの影を引きずって生きなきゃなんないんだから。あ、結局わたしも自分のことつきや考えてない。育美の命と、自分の面子とどっちが大事なのよ？ ああ、ヤダヤだ。汚い。もう人間やめたいよ！

理恵 真由美！ 育美ちゃん、事故に遭ったんですって？

真由美 あ、理恵。う、うん。今、手術が終わったところ。まだ麻酔で眠ってる。

理恵 そう。大変だったね。でもよかった。

ナレーション 知らせを聞いて駆けつけてきてくれた理恵。正直言って、心強かった。いつもは、あの、だれにでも優しい笑顔がしゃくに触ったけど、今日はほんとに優しい理恵だった。思わず、父や母、妹、そして自分の汚い部分をしゃべりまくってしまった。

理恵 真由美、打ち明けてくれてありがとう。なんか、ジンジン伝わってくるよ、あんたの心のいら立ちが。ねえ、真由美。聖書の言葉でね、「私はなんて惨めな人間

でしょう。したいと思ういいことをできずに、したくないと思う悪いことをしてしまうのです」っていうのがあるの(ローマ7:19)。どう思う？

真由美 「したいと思うことができずに、したくないと思うことをしてしまう。」…ふーん、聖書って、意外と人間臭いんだね。まるでわたしのことみたい。

理恵 でしょ？ 聖書には、人間の生き様が記されているんだもの。人間のドロドロした部分がいっぱい。だってさ、人間の心の苦しみが本当に分かんないや、神の救いも分かんないでしょ？ 自分のものにならないじゃない。

ナレーション なんとなく納得できる理恵の言葉だった。でも、すぐにもう一人のイヤな自分が頭をもたげる。

真由美モノローグ 「惨めな人間」か。分かってるわよ、それくらい。人に言われなくたって、わたしの二重人格、自分が一番感じてるんだから。だけど、人に言われるとムカつくじゃない。“わたしは弱い人間だ”なんて思われたくない。ほっといてよ。わたしのことはわたしが…。

母 真由美。育美が目を開けたわ。

真由美 あ、はい。

(効果音) (病室のドアを開ける音)

真由美 育美、育美、気がついた？

育美 う、うん。真由ネエ。

真由美 何よお。「わたしはどこ？ ここはだれ？」って顔しちやってえ。

育美 ジコっちゃったぜ。情けないなあ。もうおしまいにするっきゃないね、こんな人生さ。疲れちゃった。

真由美 バアカ。何言ってんの。甘ったれんじゃないっつーの。

育美 「死なせてくれなくっちゃ」だわ。

真由美 育美…。

育美 真由ネエ。真由ネエはさ、父さんと母さんの自慢の娘なんだからさ、頑張ってよね。

真由美 育美…。

育美 真由ネエも期待されて大変だろうけど、真由ネエは強いからね。大丈夫だよ。あたしはもう、ツツぱりきれなくなっちゃって、惨めだぜえ。自分の限界見ちゃうとき。だけどさ、“もう死ぬかもしれない”って思うと、人間、なんだか正直になれちゃうんだよね。今まで真由ネエのこと、敵みたいに思ってきたのに。ヘンなお。スツとしちゃった。

真由美 わ、わたしだって、育美がツツぱるから、反対にツツぱるのはやめようと思ってきた。育美がピアノ習うから、わたしはやらないって決めた。育美がいたから、こんな二重人格のわたしになったし、こんなわたしがいたから、育美ができちゃったんだって思ってる。だから、育美はわたしの半分でもあるんだよ。ごめん

ね。素直になってやれなくて、ごめんね。

育美 真由ネエ。アハ、寝てるとき、涙って耳の穴に入ってくるんだね。アハ、アハ、  
…(泣き出す)

真由美モノローグ 不思議だった。久しぶりに、本当に久しぶりに見た育美の涙に、わたしの中  
でも、何か硬いものが溶けていくような感じだった。わたしに涙をぬぐってもらい  
ながら、育美は再び眠りの中に入っていった。その子供のようなあどけない寝  
顔に、わたしはハッとした。

(効果音) (ノック音)

白石哲也 失礼します。

母 はい、どうぞ。あら。

理恵 あ、白石君。

真由美 白石君、どうしてここが？

哲也 岡田君に聞いたんだ。大変だったね。どう？

真由美 理恵に？

理恵 うん。同じ教会なのよ、白石君と。それで、教会の皆さんにも、育美ちゃんのこと、  
“SOSの祈り”をつないでもらったの。

真由美 “SOSの祈り”？

哲也 うん。緊急のときに連絡して祈ってもらうんだ。

真由美 祈って、くれるの？

哲也 僕や僕の家に迷惑だなんて、考えなくていいんだよ、真由美ちゃん。

真由美 でもお…。

哲也 本当に相手のこと思ってんなら、どんなことされたって、迷惑だなんて感じない  
さ。かえって、その人のためになることを願うんじゃないかな。僕はそうなりた  
いと祈ってる。心の中に闘いはあるだろうけどね。

ナレーション 「自分と闘いながら、それでも相手を愛していく。」そう言う白石君の目は澄ん  
でいた。“クリスチャンの愛って、見せかけじゃないんだ”。ふとそう思った。

真由美 わたし、“人殺し”なの。

哲也、理恵 え?!

真由美 “愛し切れないから、殺すしかない”って。白石君を守るためには、妹を捨てる  
しかないって思ったのよ。それに、理恵に優しい言葉かけてもらっても、心の中  
では文句言ったり、素直になれなくて。本当にわたしてイヤな子なの。白  
石君にそんなふうにしてもらえる資格なんてないのよ！（泣き崩れる）

理恵 (間) 真由美、やっと本当の真由美になれたわね。これでわたしたち、本当の  
親友になれるわよ。

真由美 理恵、わたしのこと、イヤにならないの？ 軽べつしないの？

理恵 どうして?! “いい子でいよう。いい子になろう”としてる真由美って、正直言って、



見てて疲れた。でも今の真由美は、ありのまんまの真由美よ。わたしと同じ、惨め丸出しの。

真由美 え、理恵が惨め?! だって、O型で、おっとりの理恵に惨めなんて似合わないよ。

哲也 そんなことないさ。二重人格はAB型だけじゃないよ。だれだって心の中にジキルトハイドが住んでるんだ。僕だって、そんな自分をなんとかしようと思って、ジタバタもがき苦しんで、どうしようもなくなった時に、イエス様信じたんだ。

理恵 真由美、さっき、「わたしは惨めな人間だ」って言った聖書の言葉、話したよね。その人がね、さんざ苦しんだあと、自分に頼ることきっぱりやめちゃって、イエス様の十字架を見上げた時に、こう言ったのよ。「ただ神様に感謝します。主イエス・キリストによって、わたしは解放されました。この方が自由の身にしてください」って。

真由美 自由の、身に？

哲也 うん。自分をがんじがらめに縛っていた自己中心の罪を、自分でなんとかしようとしているときは、地獄だった。それを全部身代わりに負ってくださったイエス様に、彼は、すっかり任せてしまったんだ。

真由美 白石君もそうなの？ 理恵も？ “信ずる”って、そういうこと？

理恵 そうよ、真由美。本当の自分に気づいたら、もうそれを隠さないで、そのまんま、ありのまんまで、イエス様の中に飛び込んでいくのよ。

ナレーション わたしは、こんこんと眠り続ける育美の顔を、そっとのぞき込んだ。その驚くほどに素直な顔は、いつしか、わたし自身のそれと重なり合っていた。その時わたしは、糸くずのようにもつれた心が、イエスという大きな存在に包まれて、少しずつ解き放たれていくのを、確かに感じ取っていた。――

<完>